
祓魔師物語(えくそしすとすとーりー)【第二巻】

神崎 冥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えくそしすとすとーりー
祓魔師物語【第二巻】

【Nコード】

N4525W

【作者名】

神崎 冥

【あらすじ】

祓魔師育成学園「私立安心院学園放課後塾」は、その名の通りに「放課後」に「塾」としてやっていた。その、安心院学園の敵は「悪魔」だった！！

ヨハネの黙示録の四騎士や七つの大罪を敵にし、学園生は今日も戦う！！

エピソード2

【エクソシスト（Exorcist）とは。】

キリスト教、特にカトリック教会の用語でエクソシスムを行う人の事。

エクソシスムとは誓い、厳命を意味するギリシャ語であり、洗礼式の時に悪魔を捨てる誓約があるが、その後に悪魔にとりつかれた人から、悪魔を追い出して正常な状態に戻すことを言う。

かつてはカトリック教会の下級叙階の位階の一つとして存在し「つまし祓魔師」と訳されたそうだ。

また、日本の神道用語が転用されたことがあるが、キリスト教と神道は異なる宗教であり、まったく別概念である。

コレは、その様な事柄を使った物語である。
しかし、上記とはやや異なる事になろう。

そんな、祓魔師の物語

第一話

今日もいつも通りの日程で、いつも通りの日々を送っている。

俺の名前は、しぐはらおうぎ「志具原扇」。私立安心院学園放課後塾の生徒だ。

得意な事は、料理と喧嘩！苦手な事は、勉強！！科は、接戦科^{アサルト}！！
！武器は、三種の神器の「草薙剣^{くさなぎのつるぎ}」！！！！！！

そんな俺は今夢の中～

アルト「起きんかい、このバカたれ！！！」

バシッ！！

扇「つてええ！！行き成りなにすんだよ！？」

アルト「なにすんだよ！？じゃねえよ！！！！今、授業中だろ！？」

扇「てへっ☆」

アルト「てへっ、じゃねえ！！！！いいから、廊下に立ってろ！！」

くっそう：

展開が行き成りすぎて悪いが、俺は今授業中に居眠りをしていたのだ。

ちなみに今のは、俺たちの教師の「小鳥遊アルト（たかなしあると）」。一々五月蠅いババアだ。

勇「元氣やなあ…」

コイツは、俺のクラスメイトの「ふじいぐれ藤勇」。
アドム装備科で、武器が好物な野郎。一応、出身地は京都らしい。

克「元氣ちゃうって。アイツはただのバカなだけ」

今の言葉は聞き捨てならんな！！！！

この、生意気な精神的ハゲも俺のクラスメイトで「しぐれかつみ時雨克」。
スナイプ射撃科で、武器は弓矢。任務とかで見たけど、結構カッコイイ武器
だった！

聞けば、藤にカスタマイズしてもらったとか。

アーサー「また、立たされているのか」

扇「アーサー！」

コイツは、「アーサー」。なんか、ヴァチカン最強の騎士で、聖
剣「エクスカリバー」つつう奴の所持者らしい。
まあ、俺には価値は分らんが、凄いらしい。

アーサー「いい加減、その癖直せ」

扇「うるせー」

どうやら、今の流れを見ていたらしい。

こんなのは、珍しい事もなく毎回立たされている。

はぁ…毎度毎度面倒だぜ……だって、眠いんだから仕方がねえだろ
！！

アーサー「それだから、」

とかほざきながら、どこかへ行った。

何しにきたんだ、アイツ！！

アルト「あにゃー、アーサーやっさしー」

扇「うおっ！？アルト！？なぜ、廊下に！？」

アルト「アルト先生…だろ？……お前が五月蠅いからに決まってる
だろ！大声で喋んなし！」

まあ、俺の日常はそんな感じだ。

アルト「おい、コイツ聞いてんのか？」

第二話

扇「はあ…散々だったぜ……」

勇「まあ、さっきのは志具原くんが悪かったんちゃう？」

克「そや」

扇「ウゼー、お前等、俺を励ましにきたんじゃなくて、貶しにきたんか」

一応、俺たち生徒はこの三人だけ。

いや…生徒って言うかチーム。この学校。チームで一クラス作るもんだから中々広いんだよ。

放課後にやってる塾なのに。ちゃんとチャイムも鳴るし、休憩もあるし…

アルト「おーい、お前等。行き成りだけど特別授業に行ってもらおう」

よく、コイツは特別授業とか行つて。

任務板から、依頼を取ってくる。任務はある程度揃っていたらやつてもいい。

任務にはある程度の難易度とかがあってその難易度に従って、貰う金も違うのだ。

一応、保険かけてるから大丈夫。

勇「特別授業って何ですか？……まさか」

その、まさかだと思う…

アルト「そ。よろっと、任務行ってきてちょ☆」

扇「はああ、マジか？」

アルト「お前は黙れ☆どうせ、こういう事でしか点数取れねえくせに☆」

扇「何気にひどっ！！」

俺主人公ぞ！？

コイツ…完全差別とやらをしてるだろッ！？

アルト「まあ、とにかく。任務を教えるぞ。ほら」

と、アルトは黒板にはる。

克「パトロール…ですか？」

勇「よかったあ…危なくない任務で……」

落ち着く、藤は任務の紙をまだ見ていない。
任務の紙を見に行く。

扇「ん…？せいおかのざん星丘之山……なにソレ？近くの山？？」

勇「ええ！！？」

扇「ぬわっ！？なにいきなり叫んでんだよ！！」

吃驚した…

コイツ、行き成り何なんだよ

勇「星丘之山って、アノ！？」

アルト「まあな」

克「先生！ソレって、少し危険じゃないですか？？」

ん…？

意味が分からんな。

扇「なにソレ…?？」

アルト「はぁ…やっぱりか…」

克「お前分からへんのか!!?」

勇「あんなに有名なのになぁ…」

苦笑いする藤。

意味が分からん……

第三話

アルト「おい、藤。お前、教えてやれ」

勇「はい」

そして、藤は言う。

勇「星丘之山は、最近妖が出るって噂があるんですよ」

扇「妖?…妖怪の事か」

勇「はい。そんでですねえ。その妖が、人間をとって喰ってしまうって言う噂があるんです。一応、捜査にいかはったらしいんですけど、その捜査員も手にかげられなくて…食べられてしもたって人もおるんですけど、殺そうとしたら殺される。ほんで、速くて体なんの妖なのかも分からへん。それに、まーりの妖を操っとるさかい、姿は中々現さないんです。」

扇「へえ」

そんな山をパトロールするのか……

依頼者は何を考えているんだ!!? ココの生徒を殺す気か!!

アルト「まあ、そんな所だ」

扇「そんな所だ、じゃねえよ!! お前ッ、殺す気か!」

克「だろ!? 困ったもんやわ!!」

アルト「ふっ、この意気地なしどもめ」

いやいやいや!!

意気地なしも何も!!!?

扇「ちょ、おまっ」

アルト「いいから、順番決めてちゃっちゃと行って来い。私は用事があるのー」

とか、言いながら教室のドアまで歩く。
そして、ドアを開けて

アルト「じゃ、頑張ってね〜ん」

とか言いながら、ダッシュしていった。
俺たちは、ドアの方向に走って向かった!!!
が、そこには、もう誰もいなかった。

克「先生…逃げ足だけ速いな……」

勇「逃げ足だけやないけどね」

と、暫く何もない空間を見ていると

アルト「うつわ!! 危ねえな! 気をつけろよ!」

克「あ、まだ居ったんや…」

突然のアルトの声に反応する。

俺も。当の昔にどっかいったのかと思った。

勇「って、言うか……コレって、順番で見回りするんですか？」

扇「アルトもそんなこと言ってたし、そうなんじゃねえの？」

克「それやったら、勇が一番不利や。装備科やし」

はぁ…と溜息をつく俺たち。

ここで、教室のドアの方から足音が聞こえた。

扇「ア…アーサー？」

そこには、アーサーが居た。

それも、髪の毛がボサボサな……

ぷぷッ！！コイツ、何やってきたんだよWWW

克「どうしたんですか…（特にその頭）」

アーサー「キミ達の先生にやられたんだよ」

少し怒り気味に言う。が、やっぱり表情は変わっていない。
無表情。アーサーは、無表情なのだ。

……………

あっはっは！！！！

つつーか、やべえ！！！！

なんで、髪直さねえんだよ！！

髪が、所々ぴよんぴよんとはねて寝起きの人みたいになっていた。
いや、寝起きの人よりも悪いかも

アーサー「何を笑っているんだ、志具原扇！」

キッ、と睨まれた！

扇「だって！…お前、髪直せよ！…！」

大声で笑う。

時雨や藤も笑いを堪えているように見える。

アーサー「くっ…仕方ない……」

と、手串で、髪を直し始めた。

勇「先生、鏡貸しましょうか？」

アーサー「いや、いい」

そう言えば、俺以外の生徒ってアーサーのことを「先生」って言うってな。

コイツ、どっかの先生なんだろうか？

第四話

扇「で、何しに來たんだ？」

俺が一番疑問に思った事を聞いてみた。
なんで、コイツが俺たちの教室に……

アーサー「この依頼の件だ。^{くだん}」

この依頼…星丘之山にでる、妖怪のことだ。
何かあるのか??

アーサー「アルテに頼まれたものでな。」

アルテ??

ダレだそりゃ……

名前がアルトと似てるなあ……

なんて思っていたら、アーサーは喋りだした。

アーサー「私も同行しろとの事だ」

克「おお！」

勇「助かったあ……」

なんか知らねえけど、2人は喜んでいた。
別に、コイツが着いてこようが、着いてこまいが、関係ないだろうに。

勇「先生みたいな強い人が着いてきてくれるなんだ光栄です」

ペコリ、と頭を下げた。

アーサーは、やっぱり無表情だ。

扇「なあ、時雨。」

克「ん？なんや」

扇「コイツって、そんなに強いのか？」

克「お前！この前も教えたろうが！！この人は、「ヴァチカン最強の騎士」なんぞ！？」

扇「ふーん」

ヴァチカン最強の騎士……
いまいち、分からないな。

扇「そもそも、ヴァチカンってなに？」

克「はあ!？」

驚かれた。

いや、つつーか。引かれた。

克「ヴァチカンつつーんは、本とか漫画とかのヴァチカンとちゃー
て、「祓魔師」の裏組織に当たる存在なんや!」

まあ、裏つつちゅー裏やないけどな。

と。意味が分からん。まず、裏の組織?そこはかっこいいけど。
どんだけ強いとかは分からんしなあ……

克「そもそも、この学校もヴァチカンの許可を得てやっとなるんや。
つつちゅーか、この学校の理事長が、ヴァチカンの騎士の一人で、ソ
レを踏まえてこの学校を創立したんや!」

扇「まず、ヴァチカンの騎士って何だ?それと、何人いるんだ?」

克「確か、引退したの含めて数えると、世界で10人。他に、強い
人や神の武器を持った者もいたが、中々協力してもらえなかったそ
うや。」

それと、ヴァチカンの騎士たちゅーんは、さっき言った組織の一番上のお方に認められた唯一の強い存在の事や」

扇「へえ……認められた……ねえ……」

世界で10人か…

その中で、最強って事は……

扇「結構スゲーじゃん!!」

克「今更か!!」

スゲーな…

扇「でも、なんで、そんな奴がここにきてんの?」

勇「あー、それ僕も知りたかったんですわあ」

アーサー「私だけではないぞ。他の騎士も集まってきている」

克「ええ!? 本当ですか?」

いやー、俺が知りたいのはなんで集まってきてるのか、なんだけどー。

アーサー「お前達は、聞いていないのか？黙示録の四騎士が復活しようとしているのを」

！！

父さんが言ってた、あの……

第五話

アーサー「…こんな時間だ……」

と、話も終わってないのに、時計を見て言う。

アーサー「時間を決めて、順番に見回りをするぞ。この依頼は、今日の9時から】だからな」

と、俺達は、依頼の紙を見る。

扇「…って、アレ???パトロールって今日だけ??」

よくよく見たら、今日の日付だけになっている。

そして、アーサーの言った通りに、9時からになっていた。

扇「でも、なんで……?」

勇「志具原くん、順番決めますよ?」

扇「お、おう!」

俺たちは、星丘之山に行くまでに役割分担をした。

9 .. 0 0 \ 1 1 .. 0 0 藤

1 1 .. 0 0 \ 1 .. 0 0 時雨

1 .. 0 0 \ 2 .. 0 0 俺

らしい。

一応、アーサーは全部に着いていくって。

相当暇なんだろうな、コイツ。

第六話

扇「じゃ、俺の番来るまで寝とくわ！」

って、言う言葉を残して、俺は寝た。

その後、時雨たちが怒鳴っていたが、ソレは気にしない。

一応。

移動方法は、車。少し大きくて何日か過ごすのには、快適(?)な
くらいスペースがある。

俺は、車の中で寝ることにした。

一番目の藤は、武器は無し。

なんか、詠唱とかなんとかで出来るゆってた。

二番目出発予定の時雨は、弓矢を構えていた。
って、言うか弓矢を綺麗にしていた。

そして、俺。俺は、草薙剣。

貴重なものだから、肌身離さず持ってろ、って2人が言ってたから
一応持っている。

コレを手にした瞬間から、俺はそういうものが見えるようになった。
から、まあ。持っても別にマイナスなポイントはないからいいけ
ど。

と、まあ。任務の為に張り切るのはいいけど。

2時間も歩くって言うのが面倒だ……本当、もう……だから俺は、こうして寝ているのだが、この中でアーサーが一番ダメルイだろうな！
ずっと歩いて、寝れないって。

俺もいつかそんな事しなくちゃいけないのか!?

……俺、祓魔師なるの止めよっかなあ……

ドンッ！！！！！

扇「ったあああああ！！！！！！？」

いきなり走った衝撃！！

俺は、その方向を見る。

克「お前の番ゆつとるやろーが！！！！」

扇「痛えんだよ！！お前、俺を蹴っ飛ばして起こすのやめてくんねえ！？」

いい加減、痛えよ！！

っつーか、身が持たなくなるし！！

こいつ、殺す気満々だろ!?

克「お前が起きないのが悪いんや!それに、そんな大声出して、勇が起きたらどうするんや!?!」

俺は、チラッと藤の方向を見る。
そしたら、ぐっすりねていた。

扇「オメーの方が声がおっきいわ!!」

車から降りながら言う。

アーサー「いくぞ」

扇「……おう」

なんか納得いかないが、仕方ない

俺は、歩き出した。

第七話

シーンと静まり返る、森。

静かだなあ．．．．．アーサーは無表情でめっちゃ姿勢よく歩いている．．．

軍隊の兵隊さんみたいだ．．．

扇「はあ．．．お前疲れねえのかよ」

アーサー「なにがだ？」

扇「小5時間は歩きっぱなしだぞ」

ここで黙る。

いやいや、黙んなや！！

アーサー「それが．．．私の使命だからだ」

．．．．．

扇「前から思ってたんだけどさ」

アーサー「なんだ？」

扇「お前って、何かと任務重視だよな」

アーサー「どういうことだ？」

ピタリと立ち止まる。

さっきまで、立ち止まる様子は一つも伺えなかったのに。

扇「いやあ・・・ほら。なんか、お前。任務の為に自分なんて・・・ってタイプじゃん？そんなじゃあ、お前。いつかその身を滅ぼすことになるぞ？」

思ったままを言う。

別に心配なわけじゃねえ・・・

けど・・・まあ・・・

アーサー「ふっ、お前に励まされるほど落ちぶれちゃいない」

嘲笑う様に言う。そして歩き出す。
けど、やっぱり無表情。

この無表情は、任務に対する執着心からだと俺は考える。
ずっと前に、父さんに聞いた話。

「祓魔師になるには、感情を捨てなければならない」

アーサーは、コレに従ったのかもしれない。

けど、父さんはソレと共にこんな事も言っていた。

「けど、祓魔師にもやっぱり感情と言うのは必要なんだ。
まあ、難しい話だけだな」
.....

両立させなければならない。
それが、アーサーの場合できていないんだ。
.....きつと。

アーサー「.....ん？」

急に立ち止まるアーサー

扇「どうした？」

アーサーは森の奥の一点をじっと見つめていた。

アーサー「可笑しいな・・・さっきからある程度は祓ってきたはずなのに・・・」

祓ってきた？

もしかして、あの2人、妖怪に遭ったのか？？

そんな疑問も定か。

アーサーは、その森の奥に入っていた。

扇「ちょ、待てよ!!」

俺もそれに着いていった。

第八話

ズンズンと入っていく。

アーサー「（可笑しい・・・こんな大きな気・・・さっきまでにはなかったぞ?）」

は、と時計を見る。

高そうな時計だなあ・・・

俺も、携帯で時間を見る。

アレ・・・?さっきまで、1時30分もいってなかったのに・・・
今は、2時・・・可笑しいなあ・・・

そして、またアーサーが進む。

アーサー「志具原扇!! 剣を抜いておけ!!」

そう言い、また進む。

俺は、渋々草薙を抜く。

そして、進んだ先にアーサーが立ち止まった。

目の前には、洞窟・・・

アーサー「ここからだ・・・」

扇「何が居るんだ？」

アーサー「これほどの気だ・・・きっと、ボスに違いない」

ボス・・・

それは、ここで悪戯（にしても過ぎるが）をしている妖怪共の親玉・
・

扇「そういや、さっきからこの辺がピリピリしてたな」

そういうが否か。

アーサーは、洞窟の中に入っていった。

———なんだお前等！？

———敵か！？

———通すな！！

とかなんとか言う妖怪。

中々そんなものに会う機会もないので、少しは怖い。

アーサー「いいか？妖怪は恐れたら負けだ。畏れるなよ？」

扇「お、おう」

恐れてはいけない・・・？？

俺にはいまいち仕組みが分からなかったが、目の前に立ちふさがる妖怪たちに目をやった。

俺は、剣を鞘から抜く。

さっきまで、布で覆っていたが、アーサーが取れているので渋々取ったアレだ。

一方のアーサーは、勇者の剣みたいな剣を腰から抜いた。

これが、エクスカリバー。

見ただけで分かる、圧倒感・・・草薙と同じくらいの価値を持つらしい。

アーサー「いくぞ」

目が冷たくなった。

無表情の上目が冷たくなった！！！！！

周りの空気が凍りつきそうだ

扇「・・・・・・・・よっし！！」

久しぶりに、振るうか!!

そして、数百匹以上ともいわれる妖怪の前に立ちはだかる!!

第九話

精神を集中させる。

そして、目を開く。その時にはもう、妖怪は襲い掛かってきていた。

扇「おおおおお!!!!」

草薙で空間を一刀両断する。

ソレとともに、聞こえる断末魔。

アーサーは無言で、何匹も倒していていた。

スラスラと倒していくスガタは、男の俺がみても美しく感じた。

時雨達がいていた通りだな。「戦う姿までもが美しく感じる」。

それが、奴アーサーらしい。

冷たく美しく高貴。

いやぁ・・・俺にはその価値は分かんなかったけど・・・

けど、こう言うのは、実感してみるものだな!

キィイイン!!!

アーサー「余所見をするな」

俺に襲ってきた、妖怪を両断する。

疲れはない、超絶余裕だった。

扇「悪いな!!」

そして、俺も戦う。

最後に、一刀両断して、終わった。
本当。10分も掛からなかった。

扇「はあはあ………」

疲れた……

剣を鞘に収めながら、息を整える。

やっぱ、実戦は違うな!

と、アーサーに目を向ける。

扇「ぬお!まさかの、全然疲れてない!?!」

吃驚!!

顔は余裕でいやがる・・・

アーサー「何を言っている。行くぞ」

扇「おう」

こうして俺と、コイツはズンズンと奥に入っていった。

第十話

扇「アーサーまだあ？」

俺の目は夜行性。

なので暗い所は、全然大丈夫のつもり。

ゴンッ！！

アーサー「くっ！！」

まただ

・・・・・・・・・・・・・・・・

コイツ、目が夜行性に向いてない所為か、よく物にぶつかる。
戦いのときは、目を瞑っても大丈夫なのに・・・・・・
コイツ、天然か？

仕方ない。

扇「ん・・・・」

手を差し伸べる。

俺がエスコートしてやるよ!! って、つもりで出した手だが……

ゴンッ!!

アーサー「つつう!!」

俺の手にすら気付いてないらしい……

コイツ、相当なバカだな^^

本当に仕方がない奴だな……俺は、自分から手を握ってやる。

こいつの手がめっちゃおっきかった。

アーサー「む……なにをする」

扇「なにをする、じゃねえよ! お前、ロクに歩けねえくせに」

アーサー「うるさい」

その声に感情が入ってないから、お前はアレなんだよ。

本当にアレだな、アレ。ん? アレって何かって? そりゃーお前。アレっていったらアレだよ。

扇「お、出口が見えてきたぞ」

出口って表現は少し違うかもしれない。

久しぶりの光が見えて、俺達の脚が早くなる。

・・・ん？

光？？今は、夜中のはずだが・・・

と、俺達はソコを抜けた。

第十一話

そこは、神々しい光が眩しいただっぴろい空間であった。
その空間は、以前。草薙を手に入れたときの空間に似ている。

扇「おお・・・夜なのにすげえな」

アーサー「流石だな。コレほどだったら・・・」

と、あたりを見渡すアーサー。
何か言いかけて、黙る。

扇「どうした？」

アーサーの視線の先に、俺も目を向ける。
ソコは、螺旋階段みたいになっていて、なんか・・・物凄い高さがある。

扇「登るのか？」

アーサー「そうだ」

無表情で、螺旋階段に近づいて、上る。
俺も負け時との乗る。

扇「はあはあはあ・・・」

つ　　がれだああああ！！！！

もう、何分上っているだろうか・・・・・・

休憩なしに、ずーっと登り続けているうえ、上がる速度が速い。

アーサー「どうした？もう、へばったか」

扇「うゝるゝぜー」

アーサー「少しは体力面も鍛えろ」

お前に言われなくても分かってるよ！コノヤロー

は、と上を見る。あ、もうちょっとだ・・・！！！！

アーサー「・・・・・・・・」

そう思っている否か。

アーサーの顔が行き成り陰しくなった。そして、エクスカリバーにソツと手をかざす。
なんだ？敵か？？

そんなこんなで、後5段で、地上に着くという所までいった！！
はあ、ここまでの道のり辛かったぜ！！！！

扇「よぉーっし！とうちゃく！」

と、地上？に立とうと思った次の瞬間！！

アーサー「危ない！」

ドワツ！！

と、アーサーに、後頭部を蹴られた。

扇「ぶっ！！！！」

俺は、そのまま地面とキッス☆する事になった。

いや、キッス☆どころじゃない。鼻が！！！！鼻がああああ！！！！

扇「つてええええええええええ！！！！！！！！！！テメエ、アーサー！！！！何しやがるんだよ！！！！」

思いつき振り向く。

多分、鼻血でてる！！アイツ・・・なぐつてや・・・る???

俺が、振り向けば。

後ろの壁が何かに切られたように割れていた。

扇「なんだアレ!?!」

は、とアーサーをみると。なぜか息切れしていた。

アーサー「流石だな・・・・・・・・・・正体が分かったぞ」

扇「なんの?」

アーサー「ここのボス」

扇「マジか!?!」

今の一撃で!?
すげえな!

扇「で、だれなんだ?」

アーサー「白面金毛九尾の狐
ね……………だ」
(はくめんこんもうきゅうびのきつ)

扇「九尾……………狐?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4525w/>

祓魔師物語(えくそしすとすとーりー)【第二巻】

2011年11月15日17時36分発行